

とがよく解っていないためではないかとも思われま  
ず。現時点で資料、情報が不足して、どの先生がど  
んな研究をしていらっしゃるのかわからないという  
ことは、多くの学生が感じていることです。(これに  
ついては『飛翔』・『メタセコイア』に毎号掲載され  
ている「学問のススメ」も資料になると思います。)   
希望として、2年になってコースを決定する前に、  
卒論のテーマなどの資料を提示して欲しいという意  
見もありました。また54生の中には直接教官のとこ  
ろへ話を聞きに行ったという話を聞いて、私たち55  
生も、そういった事を積極的にどんどんしようとの  
提案もありました。次に不満を持った人の意見とし  
て「ソビエトとか中東とかに関しては先生がいない」  
という意見もありました。けれども、これは大学側  
だけの問題ではありません。どちらかと言うと学生  
側に自主性・関心が欠けていて、勉強しないから  
「わからない」という状況に落ち込むのではないで  
しょうか。そういう点から見ると、むしろ、現状に  
不満を持つの方が、学問に対して積極的であると  
言えるのかも知れません。

・Q 2の問Bについて

まず、設問の「総合的」という意味があいまいで  
あったということが考えられます。何が「総合的」  
なのでしょう。4つのコースをすべて合わせれば  
総合的なのでしょうが？具体的ににはよくわからない  
が大多数の学生が、漠然と好意的であるというのが  
実状でしょうか。

・問Cについて

肯定的意見が多く、入学後とさして変らない所にか  
えってひっかかります。

学際領域というのは何なのでしょう。 「ふたつ  
の学問があって、その間に位置づけられる、片側か  
らだけでは十分に研究しきれない分野」と考える考  
え方もあるし、「ふたつの学問をくっつけたもの。」  
という考え方もあります。また、「総合科学部で学ん  
でその分野でエキスパートになれるのだろうか。」  
という疑問もわいてきます。先輩の話によると他学  
部の人と専門の話をしていた時に、相手が「あなた  
の専門の講義のような学問があるのか。」と不思議  
な顔をした時に、はじめて「学際領域」という「存在」  
を感じたそうです。

最後に冗談半分の言葉が飛び出しました。「よく  
言う専門バカにはなりにくい。」でも、悪くすると、  
どうなるのでしょうか。(この点「卒業生のアン  
ケート」P.3も参照下さい。)

・問Dに対して

Q 2中、ただ一つ不満がわずかながら増えたのが  
特徴的でした。しかし、「プログラミング通論Ⅰ」  
が必修であるため、真面目に勉強してマスターすれ  
ば、コンピュータが使えるということは就職の際に  
有利なはず。また、総合科学部という言葉が、  
「専門以外の何かを持っている。」という雰囲気  
を与えることも有利だと思います。先輩の話によると、  
実際にも総合科学部の学生は多くのことをかじっ  
ているし、また、その機会にも恵まれているとい  
うことでした。パイオニアとなる者に不安はつきも  
です。(この点、「就職委員会だより」P.42を参照下  
さい。)

・Q 3について

「やはり学生が主体であるはずなのに無視されて  
いる。」「成績によって振り分けられるのは総合科  
学部に独特なことではないし、どうしても希望のコ  
ースへ行きたければ、それだけ勉強すべきだし、そ  
れを無理を言うのは甘えてるのではないか。」「し  
かたない。」「当然だ。」などの意見のように、賛  
成派・反対派・容認派と、意見はまちまちなので  
すが、やはり、理想は『やりたくて、しかも実際に努  
力している者』全員が各コースへ志望通り入れるこ  
とでしょう。しかし、現状にはいささか不満がある  
ようです。要望としては、毎年、志望者数が定員を  
越える傾向にある「情報行動科学コース」あるいは  
「社会文化コース」の施設や教官を学生の志向に即  
して開放してほしいということでした。

次にアンケートを集計して何とも嫌な気分にな  
ってしまったのがQ 4です。

『飛翔』の委員間の話し合いでもいろいろな解釈  
が出てきました。

入学の目標達成後の虚脱状態の告白には本当に暗  
たんたる気持ちになってしまいます。多くの学生が  
こういう風に感じているのは、生活に積極性が欠け  
て怠惰な正月休暇あけに調査を行ったせいもあると  
思います。決して学生が何も考えていないわけでは  
ないことは、次のQ 5で「本当のものを確かみたい。  
充実感をもちたい。」という気持ちをみんなが持っ  
ているのでわかります。とにかく早く次の身近かな  
目標を設定するか、何にでも首をつっこんでみて、  
時々自分を振り返ってみることぐらいしか解決法は  
ないのではないのでしょうか。後期の試験あけに調査  
したら、また別の結果が出たのかも知れません。

・Q 5について

Q 5 で多くの積極的な意見が出たのは、Q 4 の裏返しで、決して55生は心までは眠ってはいないということだと思います。

・ Q 6 について（アンケート結果の補足程度のことしか私たちにできませんが…。）

一つの特徴として、自分が何かをやるとうる場合に、学問としていろいろな道具（武器と言ってもよいかもしれません。）が用意されているということがあります。コンピュータが重要視されていることも、そんな面では有利でしょう。ただ、何をどのように使えばよいのかということを見つけることは我々の主体性にまかされています。自主性という両刃の剣を使いこなせる人にとっては総合科学部は非常に魅力的な学部でしょう。けれども、自分で働きかけないと何も得られずに時間だけが過ぎてゆく学部であることも確かです。ある意味で最も大学らしい学部です。（この問題に関しては、「卒業生へのアンケート」の「学部観」の項P.3の方が参考になりそ

うです。）

また、一年次は、一般教育中心の人間形成期で志望の専攻分野とは一見無関係と思われる科目や、基礎科学の多い年です。そこに、学際領域の花形研究に直接触れ得ない誤解や混乱が「学部アイデンティティの拡散」の結果をよぶのかも知れません。

だが、入学9ヶ月後の55生に総合科学部が本当になにかわかっていている学生が非常に少ない、いや、もしかしたらひとりもないのかもしれないということは極論でしょうか。群盲象を撫でる図を提示して、かえって56年度生の皆さんを混乱させるだけかもしれません、こんなことを考えた一年先輩の学生がいるということで、いささかでも「他山の石」にでもなれば幸いです。（この記事について御意見がありましたら、学年を問わず、進んで『飛翔』へ投稿して下さい。）

55年度生 雲井 司

シリーズ・その13

## 学問のススメ

上 領 達 之



一口に学問と言ってもその意味する処は複雑である。複雑というのは学問分野や方法論の多様性ではなく、人間の関り方のそれである。学問は勿論人間の営み、それも重要な営みの一つである。然し敢えて言うならば、それは非人間的な側面をも抱えたものである。

学問は人に没頭することを求めてやまない。寝食を忘れ、妻子をも等閑に附することを求めてやまない。そのような魔性をもった学問を若い人達に、大学の門を潜った全ての若者達に、勧めるべきや否や。私は大学院を出てから今日までの10年間、研究にこそ携わってきたが、教育には全く無関心であった。無関心で居ることができたのだ。そういう新米教師として、突如その教育に直面することを強られた時、学生とは一体どういう相手なのか、それが判らなかつた。辻説法の前を通りかかった、何時立ち去るやも知れぬ、縁なき衆生であるのか。それとも確固たる志を立てた若き学徒なのか。教師は彼等に何を教

えるべきか。彼等に何処までの努力を求めるべきか。数ヶ月の間それが判らなかつた。ここではそんなことを話題にしてみたい。

＊ ＊ ＊ ＊

大学は学問の場である。学問以外にも様々な役割があることを認めることには吝でない。然しそういう附加的な価値を剥ぎ取っていった後に残る本質は蓋し学問である。これを教師の立場で言えば教育と研究である。教育とは学問への入門指導であり、研究とは学問の実践であろう。学問を勧めるべきや否やと言ったのは、学問の職業的実践についてである。入門指導はせざるべからず、それを求めて門を敲いた人々を前にする時、勧めるとか勧めないとかいうことは話の埒外である。入門指導は勿論その実践を究極の目的とする。入門指導を受けた後に、それを職業として選ぶか否かは、好き嫌い、得手不得手、全て本人の問題である。ただ、その選択を正しく行なう為には、正しく指導を受けねばならぬ。或は耐えねばならぬ。当り前のことだ。長唄のお師匠さんの許へ通うことを考えてみればよい。物覚えが悪い

とっては罵られ、稽古が足りぬとては撻でも打たれよう。その挙句に芸で身を立て得る人は稀である。然しだからといって辛い稽古が徒勞であった訳ではない。だからといって稽古を怠けていいという理由は更でない。教師は精根を傾けて学問の何であるかを伝え教えねばならぬ。学生は全身全霊を挙げてこれを学び習わねばならぬ。学生と雖も大学に居る限りは学問に没頭せねばならぬのだ。よし、それがほんの入門の第一章であるにしても。没頭すればその対象の大小、軽重は眼中を去る。没頭すれば如何に瑣末なことであれ、その解決に無上の欣びを感じるのみである。先人の謂を引こう。「また或る日、鼻のところにて、フルヘッヘンドせしものなりとあるに至りしに、この語わからず。これは如何なることにてあるべきと考へ合ひにし、如何ともせんやうなし。その頃釋辭書といふものなし。漸く長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合せたるに、フルヘッヘンドの釋註に木の枝を斷ち去れば、その跡フルヘッヘンドをなし、また庭を掃除すれば、塵土聚まりフルヘッヘンドすといふやうに讀み出だせり。これは如何なる意味なるべしと、また例の如くこじつけ考へ合ふに、辯へかねたり。時に、翁思ふに、木の枝を斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、また掃除して塵土聚まれば堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、フルヘッヘンドは堆（ウスタカシ）ということなるべし。然ればこの語は堆と譯しては如何といひければ、各々これを聞きて、甚だ尤もなり、堆と譯さば正當すべしと決定せり。その時の嬉しさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり。」<sup>1)</sup> また、「學問に生きる者は、獨り自己の専門に閉じ籠もることによつてのみ、自分はここに後々にまで残るやうな仕事を成し遂げた、という恐らく生涯に二度とは味はれぬであらうやうな深い喜びを感じることが出来る。實際に價值あり且つ完璧の域に達してゐるやうな業績は今日皆専門家的に成し遂げられたものばかりである。だからして謂はばみづから遮眼革を着けることのできない人や、また自己の全心を打込んで例えば或る寫本の或る箇處の正しい解釋をうることに夢中になるといったやうなことのできない人は、先ず學問に縁遠い人々である。」<sup>2)</sup> 私の恩師に松橋通生先生がおられる。先生はドイツ生化学界の泰斗、ノーベル賞をも授けられた故F. リネン教授の高弟の一人であるが、「リネン先生はかのH. ヴィーランドの女婿であつて、若くしてヴィーランドのサロンに

出入りすることができた。そこはO. ワールブルグをはじめ当時の華々しいドイツ化学界を背負う錚々たる大物達の集う處であつた。そのサロンで先生は大科学者達が本当に些細なことにも欣喜し、興奮する様を眼の当りにされた。そして學問をすることが、如何なることにも大なる喜びを見出すことであることを身にもつて悟られたそうだ。」と常々語っておられた。

＊ ＊ ＊ ＊

学生も高学年となり、或は大学院へも進んだとしよう。再び、彼等に學問を勧めるべきや否や。かつて學問は閑人の業であつたらしい。scholarの語源がそれを教へてくれるとのことである。然し今日學問に携わる人間が時間や金を持余した閑人であることは稀であらう。そこで學問と職業の関りが生ずる。「身を立て、名を挙げ、やよ励めよ」となると、時には争いの渦中に身を置くことも余儀なくされる。學問が竹林の遊人の慰ではなく、欲も得も、見栄も外聞もある生身の人間の職業である以上は。「かくて大學に職を奉ずる者の生活はすべて僥倖の支配下にある。若い人達から就職の相談を受けた場合にも我々は彼に對して自分の言葉の責任を負ふことは出来ない。(中略) そうした場合我々は彼に向つて、君は凡庸な連中が年一年と君を越して昇進して行くのを見て、腹も立てず氣も腐らさずにゐられると思ひますか、という風に念を押しておかなければならない。ところがかうした人達から受取る答はきまつてかうである、勿論です、私はただ私の『職業』に生きるのみです。——だが少くとも私の経験では、かうした人達が精神的に打撃を受けることなくその生活に堪へた例は極めて少ないのである。」<sup>2)</sup> これは欧州大戦直後のドイツの青年に向つて語られた言葉である。そしてこの言葉が今日の日本には当て嵌まらないという証拠を私は知らない。それでは學問を志すなというのか。向学の志を捨てよというのか。否。否。榮譽榮達は固よりのこと、友の同感をすら引き出すことができずとも、没頭の後の成就に勝る喜びはない。それだけは私にも保証することができる。苦心の一傘を空中に開かした花火師の胸中を思うがよい。一瞬の光芒の他に何を望むであろう。あの喜びのためにのみ、彼等にも學問を勧めようと思う。

＊ ＊ ＊ ＊

今日生命科学は一大飛躍の秋を迎えている。將に未曾有の時代と言っても過言ではない。過去におい

て能くこれに比べ得る時代を探すなら、1940年代の末期、生化学者の手に放射性同位元素で標識された化合物が委ねられ、中間代謝の研究が怒濤の勢いで押し進められたあの時代を措いてはあまい。研究者としての寿命を30年程だと認めれば、私の世代は言うに及ばず、今から学問を始める人達でさえその精力的な活動の期間に次の大飛躍を迎え得るかどうか甚だ疑わしい。今一体何が起っているのか。それを言おう。生命の本質が刻み込まれている遺伝子、100年以上もの間神秘の闇の中でのみ語られていた遺伝子、我々の身体の中のたった1個の細胞の中に10万前後もの種類のある遺伝子、その遺伝子の内の任意の1種を意の儘に手に取ってみることが可能になったのだ。それだけではない。凡そ1万個の文字で書き綴られたその遺伝子の文章を、一字一句の間違ひもなく読み取ることが可能になったのだ。考えてもみ給え。40億個の文字を連ねた異国の経文、

〔自由投稿〕

## —日本人のなかの「パレスチナ問題」—

土井敏邦

### 1. なぜ闘うのか

1972年5月5日、ミュンヘン・オリンピック選手村をゲリラ8人が襲撃。イスラエル選手団11人、ゲリラ5人死亡。犯行グループ「黒い九月」

1974年5月10日、ゲリラ3人がイスラエルキルヤトシモナの小学生90人余を人質に取りゲリラ23人の釈放を要求。イスラエル実力行使。28人死亡、73人けが。犯行グループ、PFLP。

1978年3月、女性2人を含む11人のゲリラ、イスラエルのテルアビブーハイファ間のハイウェイでバス乗取り。イスラエル実力行使。イスラエル人37人死亡、82人けが。犯行グループ、アル・ファタ。

パレスチナゲリラの、イスラエルに対する闘争は限りなく続く。そして、そのたびに世界のマスコミは「非情なテロ」として大々的に報道する。しかし、多くの場合、それらマスコミの報道にひとつの問いかけが忘れられている。

「なぜ、彼らは『非情なテロ』を果しなく繰返すのか。」

「なぜ、彼らは自らの死と世界の世論の非難を覚悟で闘いつづけるのか。」

1978年3月、私はイスラエルのあるキブツで、そ

たった4種類の文字でのみ記された、句読点すらなき経文の中から、1万文字に相当する一節を探し出すことを！その一節の一字をも失うことなく、誤ることなく読み取れることを！それが可能になったのだ。神様が遺伝子の中に書き込まれた詞。そう、神の詞だ。その詞を読み明かすことができるというときに、一体どんな苦勞を厭うというのか。その詞の意味を初めて知り得た時の震えるような喜びを前にして、一体何を躊躇うというのか。

＊ ＊ ＊ ＊

私は彼等に、いや、君に、学問を勧めようと思う。

- 1) 杉田玄白(1815)「蘭學事始」 緒方富雄校註 岩波文庫
- 2) マックス・ウェーバー(1919)「職業としての學問」 尾高邦雄訳 岩波文庫  
(情報行動基礎研究・助教授)

のゲリラのバス乗取り事件を知った。また、ある日、我々のキブツに近いヨルダンとの国境を4人のパレスチナゲリラが越え、近くのモシャブ(共同村)を攻撃したという報に、キブツからの外出は一切禁じられ、マシンガンを下げたメンバーたちのものものしい警備が昼夜続いた。ヨルダン川西岸では、ドイツ人青年の、私と同じボランティアがゲリラによるバス爆破の犠牲となった。

「なぜ、」という疑問は、それら一連の事件を通して、私のなかにますます重くのしかかってきた。



パレスチナ難民キャンプ(ヨルダン・マラカキャンプ)ここには現在、3万人以上の難民が住んでいる。UNRWA(国連難民救済機関)提供

そして、その疑問に迫らたてられるように、私はヨルダン川西岸のアスカル難民キャンプを訪れた。

1978年8月である。

芝生や木立の緑と色とりどりの花に囲まれたモダンな住居の建ち並びキブツから200kmも離れていないアスカルには、むき出しのブロックとレンガの壁と、石のおもりの下に無造作に並べられたトタン屋根の住居が密集し、汚水が溝をつくり悪臭を放って露地を流れる。そんな世界がそこにあった。

1950年に建てられたこのアスカルキャンプには当時、1,063家族、6,671人が住みついていた。そのほとんどが1948年(イスラエル建国)以前はジェファ地方の25の町や村の住民たちであった。故郷を離れて30年を経ても難民たちはジェファ出身、ハイファ出身であることを忘れない。彼らは、イスラエル人に追われ、あるいは殺戮の恐怖にかられて自らそれらの地を逃れた。故郷を失って、今彼らは、狭く、しい質素な住居に押しこめられるようにして生きている。

「しかり、われわれは、すべてを失った  
人生を失い、その意味を見失った  
人間性をも失った  
われわれは領土を失えば、  
人生も失う  
領土は人生の根元だから」

ライラ・カリドの詩の一節である。「帰属すべき土地と血縁とを失うことは社会的に通行証を失うことである」といわれるアラブ社会において、故郷を失うことは、まさに「人生の根元」にかかわる問題である。

故郷には、住居も財産もあった。しかし今は、UNRWA(国連パレスチナ難民救済機関)の施しを受けて生きている。それは、彼らにとって屈辱である。「自明の真理」であり「一定のゆずりわたすことのできない権利」であるはずの、個人の、そして民族の基本的人権を、彼らは奪われたのである。

「なぜ、彼らは自らの命を犠牲にしてまでも闘うのか。」という問いに、「パレスチナ人たちは、一人一人がフェダイーン(戦士)となって個人の短かい生を投げ出し、そのひとつひとつの生をつなぎ合わせて、自己の集団が将来叶えられるであろうもう一つの生を自分の生と考えるに至っている、そのために自分の生涯を投げ出している」とある人は答えた。

「そのひとつひとつの生をつなぎ合わせて自己の集団が将来に叶えられるであろうもう一つの生」こそ、彼らの故郷において、「自明の真理」である「一定のゆずりわたすことのできない権利」が回復されて生きる「生」であるといえまいか。

私の、パレスチナ人の基本的人権の問題への関りは、そのようにして始まった。

## 2. 「等身大の問題」として

1978年9月、カーター大統領、サダト大統領そしてベギン首相の3者首脳会談によるキャンプ・デービッド合意がなった時、世界のマスコミの多くは、「中東の平和の到来」と3首脳を賞讃した。当時、外交評論家小山高行氏は、「中東に無知な日本人」という題の文章の中で、キャンプ・デービッド合意を歓迎し、その理由として単独和平で一致したこと、PLOが完全に切り捨てられたことなどをあげて、「同床異夢の分裂状態のアラブ世界からして和平実現への具体的第一歩を進めるには、これが最良の方策であったと思われる。本来包括的和平などあり得ないだけに、カーターはこの構想を後退させて現実を直視したところに会談が成功した所以がある。こうした即成のワク組の積み重ねによってPLOやシリアなど強硬派に目覚めてもらうしか、中東に恒久的和平がこないからである。」と述べている。さらに「何はともあれ、これで『第5次中東戦争』はなくなったといってもよいだけに、3首脳の努力に心から敬意を表しておきたい。」と3首脳を賞讃する。

これら、キャンプ・デービッド合意歓迎の論者たちの視野のなかには、180万人にもおよぶパレスチナ難民は存在しない。彼らは、中東問題の本源は、イスラエルとアラブ諸国という国家間の関係にあるのではなく、「ヨーロッパからの難民」すなわちユダヤ人難民の問題解決のために、もうひとつの難民をつくり出し、彼らの基本的人権を剥奪し続けていることになかにこそあるという事実を直視しようとはしない。この「基本的人権の剥奪」に問題の本源がある限り、その解決への道も、国家間の問題として調整されるべきではなく、基本的人権という「等身大の問題」として、探究されなければなるまい。

この本源的な問題の解決なくして、国家間の力のバランスの調整に終始しようとするばたとえ、短期的な「平和」は保てても、その根底にある問題は一層その根を深くしていくであろう。「中東の恒久的な和平」のために「目覚めてもらう」べきなのは、